

きものに関するキーワード探索研究 (第2報)

知野恵子* 内山道子**
寺田恭子*** 渡邊芳道****

The Reserch of kimono's Keywords (Part II)

Keiko CHINO, Michiko UCHIYAMA
Kyouko TERADA, Yoshimichi WATANABE

1.はじめに

日本文化の伝統を見直そうとする気運が高まっている。その動きの中で最近ヤング世代を中心に、きものに対する関心が一段と強まりつつある。夏の「ゆかた」がファッションとして復活し、百貨店における販売も従来の呉服売場よりも、水着売場の方が好調な売行きを示すなどの現象が見られる。ヤング世代にとってゆかたは今までのきもの延長ではなく、カジュアルな夏の新しいアイテムとして脚光を浴びている。こうしたきものに対する時代の変化は、伝統的な着装観をも変化させることになる。

そこで、きものに関する調査の第2段階として、今回はさらに時代を33年前にさかのぼり、1964年(昭和39年)春から1982年(昭和57年)冬迄の19年間、76シーズンにおけるきもの専門誌「美しいキモノ」の目次に記載された編集タイトルのテーマを対象に、前回の分析形式に準じて、キーワード出現状況を分析することにした。調査方法は、上記専門誌の目次に用いられた編集テーマの中から、(1)きもの地、(2)きもの種類、(3)きもの用途、(4)オケージョンに関するキーワードについてその出現頻度を調査の対象として時系列に分析し、項目間の関連性を調整しながら19年間の動向を考察した。

2.研究方法

(1) 分析資料

きもの専門誌「美しいキモノ」
出版社 婦人画報社

(2) 分析期間

1964年春号から1982年冬号迄 計76冊

(3) 分析項目

*服飾美術学科被服衛生学研究室

**服飾美術科第3被服構成研究室

***服飾美術学科第3被服構成研究室

****服飾美術学科ファッションビジネス研究室

- 1) きもの地
- 2) きものの種類
- 3) きものの用途
- 4) オケージョン

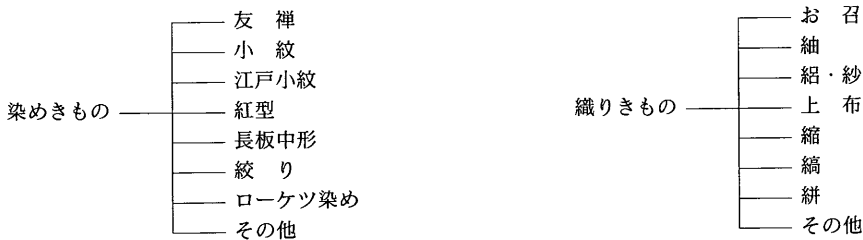
3.分析結果

(1) きもの地

1) きもの地の種類

きもの地の種類を染めのきものと織りのきものに二大別し検討した。一般的に染めのきものは、白地の織物に染色する技法によって種類が区別される。また織りのきものは、糸染めして無地や柄に織り上げた素材によって種類が区別されることが一般的である。(表1)

表1 染のきものと織りのきもの



2) きもの地の分類

'64年から'82年までの19年間のきもの地の出現頻度を調べるために、染めのきものと織りのきものに分類し検討した。

○染めのきもの (表2)

染めのきものでは、小紋、友禪、更紗、ゆかた、ローケツ染め、絞りなどのおもなキーワードが17抽出された。抽出された17のキーワードのなかで小紋、更紗、絞りにはその種類が豊富に出現しているのが特徴である。また出現頻度の高いキーワードは小紋、ゆかた、友禪の順である。

・小紋は19年間すべてに出現しているが特に'64年、'65年、'67年、'68年、'72年、'74年、'80年に高い頻度で出現している。小紋は江戸と京都が二大産地として有名であるが、その他にも全国的に染められた日本の代表的な染色の一つである。京都小紋、付け下げ小紋など種類が豊富に出現しているのが特徴である。小紋は本来の細かな柄の江戸小紋から、色、柄ともに華やかな小紋まで多様であり、準礼装からおしゃれ着まで幅広く用いられる。

・夏衣であるゆかたは小紋について出現頻度が高く18年間出現している。特に'65年、'75年に高い出現頻度である。ゆかたは普段着として着装が簡単で、気楽に楽しめる夏のファッション

表2 染めのきもの

(N)

項目	年代	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82
小紋 (江戸小紋・京染小紋 付け下げ小紋など)		23	17	7	17	12	5	4	4	15	7	10	4	5	3	4	5	10	8	9
友禪		2		2								7		1						1
加賀友禪		1			7	1								6					2	1
京友禪					1															1
型染				1			1		1										1	1
紅型			1	1	2											4		1		
更紗 (和更紗・鍋島更紗・インド更紗 など)		6	3	3		2		1				2								
長板中形														1						
ゆかた		4	7	4	1	2	1	2		1	3	1	9	1	1	2	1	5	1	1
ローケツ染		5	5	4	5			1		1										
絞り (総絞り・鹿の子絞り・辻か花)		1	8	9		1								1		1		1		4
草木染め		1	1	4	1		1											4	7	
藍染め		1		1		1			1						1		4	1		1
色無地・無地染め			1			1			1											
絹 (駒廻など)		1	1																	
その他 (ぼかし染め・珊瑚染めなど)		1	1																	1

ンアイテムである。

・友禪は友禪、加賀友禪の出現頻度が高く、友禪では'74年、加賀友禪では'67年、'76年が高い出現頻度である。友禪は日本染色の代表的な染めであり、染めの絵画ともいわれている。また四季の草花をはじめ、あらゆる事物現象から図案をとり、色彩豊かに自由に染め上げられた華やかで美しい染色である。留袖、振袖、訪問着、付け下げ、小紋などフォーマルからおしゃれ着まで幅広く用いられている。

○織りのきもの (表3)

織りのきものでは、紬、お召、紗、緋などおもなキーワードが15抽出された。抽出されたキーワードには、それぞれの種類が豊富に出現しているのが特徴である。また出現頻度が高いのは、紬、大島紬、結城紬の順で全体の半数以上をしめる。次に緋、お召の順に出現頻度が高い。

・紬、大島紬、結城紬は'64年から'82年の19年間常に高い頻度で出現している。特に大島紬、結城紬は出現頻度が高いので紬とは別に表記した。また紬をみると信州紬、長井紬、石下紬など多くの種類が出現しているのが特徴である。

紬は古く奈良時代より生産されていたものであり、江戸時代になって各地で盛んに織られるようになった。古くから織られたもので有名なものに、久米島紬、大島紬、結城紬、上田紬、郡上紬、長井紬などがある。元来紬は真綿から手で引き出した紬糸を用いた織物であるが、玉糸やくず繭からとった紬糸から織られるものもある。また石下紬のように絹と綿の交織で織られるものもある。織り上げるのに非常に手間がかかるために高価であるが、正装用として用い

表3 織りのきもの

(N)

項目	年代	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82
紬 (信州紬・長井紬・石下紬など)		10	13	18	7	4	3	7	9	1	12	4	8	8	5	4	9	15	10	8
大島紬		3	3	5	4	2	3	2	2	4	2	2	5	11	6	4	5	3	6	4
結城紬		1	1			2	1	1	2	3	3		9	3	4	3	3	2	3	3
本塩沢・夏塩沢				1	1												2			
黄八丈 (八丈・秋田・米沢)						5			1						1					
御召 (西陣・塩沢など)		17	10	5	1		2	2	3		1					2				
上布 (宮古・越後など)				1							1		1		3				2	
芭蕉布				1											1					
縮		2	2								2					1	2		2	
沖縄の花織																				1
紗 (ウール・ポーラなど)		7	3	4	5	1				2	1								1	1
緋 (十日町・久留米など)		5	12	9		5	1		3		2	1	1	5	5				1	2
縞・格子 (唐・間道など)		1	2	4						1	1					1		1	1	3
銘仙			1																	
西陣のきもの											1		3	2	2	2	1	2	2	2

ることはあまりなく、おしゃれ着（旅行、ショッピング、観劇）、普段着（お稽古着、家庭着）として広範囲に着用できる大変贅沢なきものである。

・緋は13年間出現している。とくに'65年の出現頻度が高い。経糸、緯糸または両方の糸を括るなどの技法で防染をし、部分的に染色をして緋糸をつくり、布面にかすれた文様を織り出した素朴な感じの織物である。

緋の技法はインドが発祥の地といわれ、これが琉球に伝わり琉球緋となるが、日本独特の技法が考案されたのは、享和年間久米島の井上伝による経緯緋でいわゆる久米島緋がその最初である。以後緋の技法が発達し今日のように一般的ななったのは、江戸末期から明治初期にかけてである。日本中に広まった緋は地方色が強く、種類も多く今日でも外出着から普段着まで幅広く用いられている。

・お召は9年間出現している。とくに'64年、'65年の出現頻度が高い。お召はお召縮緬を略して一般的に呼ばれる名称である。名前のおこりは、京都西陣で織られたお召縮緬が宮中に納められて以後お召と名付けられたとも、また11代将軍家斉がこの御召を愛用し、縞模様を織らせ、お止柄、お止縞として一般の使用を禁止したため、将軍の御召衣料という意味ともいわれている。

お召は織る前に糸を練り、色染めをするので先練糸染織物であり、布地全体に細かいしぼがあるのが特徴である。糸質、織り方、文様、柄、産地などでそれぞれ異なった名称で呼ばれる。張りがあり、しわになりにくいいため戦前までは織りのきもの代表として、訪問着や外出着として愛好されていた。しかし現在ではほとんど生産されなくなった。

・その他夏のきもの地として紗が9年間出現している。ウール・ポーラ紗という強撚梳毛糸を用いた通風性のあるきもの地が出現している。また夏塩沢、上布、芭蕉布、縮など他の季節

表4 その他のきもの地

(N)

項 目 \ 年 代	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82
ウール (モスリン・シルク ・ウールふくむ)	5	7	7	2	2		1		1	2		4	2			1	2	3	2
木綿			1	1	2	1		1						2	1	2	3		
麻																			1

に比べると、多様な種類が出現している。

○その他のきもの地

表4の通りウール、木綿、麻というように素材別にそれぞれ14年間、9年間、1年間出現している。ウール、木綿、麻はともに普段着の素材である。

(2) きもの種類

長い伝統を誇るきものは、日本の風土のなかではぐくまれ、四季の変化に応じて種類や装いが確立された。きもの種類は、礼装着、略礼装着などのように用途別に区分され、さらに模

表5 きもの用途と種類

用 途	目 的・場 所	きもの種類
礼 装 着	結婚式や公的な儀式など 格式を重んじるとき	花嫁衣裳 本振袖 (ミス、染め抜き5つ紋付き 黒縮緬の絵羽総模様) 黒留袖 (ミセス、染め抜き5つ紋付き 縮緬地の裾模様) 色留袖 (染め抜き5つ紋付き) 喪 服 (染め抜き5つ紋付き黒縮緬 または黒羽二重)
略 礼 装 着	礼装に次ぐきもので色・模様ともに 少しくだけ、華やかさがあり、結婚 式の披露宴や卒業式、入学式、初釜 などのとき	色留袖 (紋付き) 振 袖 中振袖 訪問着 色無地 (紋付き) 江戸小紋 (紋付き)
外 出 着 おしゃれ着	社交用として格をもたせて装うもの と、外出用として個性に合わせて趣 味的に装うものがある。 TPOに合わせて、パーティ、おしゃ れ着、お茶会、街着など	色無地 江戸小紋 付け下げ 付け下げ小紋 小紋 紬 類 お召
普 段 着	ちょっとした外出、ショッピング、 お稽古、家庭でのくつろぎのとき	紬 類 絁 類 ウール ゆかた

様付け、きもの地、紋、地色などの要素が複雑に組み合わせられ格付けされている。一般的には

表6 きものの種類

(N)

種 類	年 代	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82
打 掛						1														
黒 留 袖						5	1					1	1							1
留 袖		3	3	6	2		4	1			1	4	3					2	4	3
色 留 袖				1	1	1					1			1						1
喪 服				1	1	1			5			2								1
本 振 袖			1	13	2															1
振 袖			2		1	2	1	1												3
中 振 袖		6	9	24	2	2		2		2		2		1		1	1	1	1	1
小 振 袖						1														
訪 問 着		15	44	25	27	6						1		1	1	4	5	7	10	9
色 無 地						1			1											
付 け 下 げ				1	7					1	1	3	1	2	1	4	5	3	6	4
付 け 下 げ 小 紋									1											
江 戸 小 紋		1			2	1					1	8						3	1	
小 紋		19	17	7	17	12	5	4	4	16	6	2	4	5	3	4	5	10	7	9
お 召		17	10	5	1		2	2	3		1					2				
紬		16	18	25	12	7	7	11	14	8	18	5	23	21	16	10	17	22	19	16
緋		5	12	9		5	1		3		2	1	1	5	5					1
銘 仙			1																	2
ウ ー ル		8	9	7	1	2		1		2		1	1	1			2	3	1	
ゆ か た		4	7	4	1	2	1	2		1	3	1	9	1	1	2	1	5	1	1

表5のようにきものの種類を分類することができる。この分類を基準にし、1964年から'82年まで19年間種類に関するキーワードを21抽出することができた。(表6)

1) 礼装着・略礼装着

礼装着、略礼装着は、留袖類(黒留袖、留袖、色留袖)、振袖類(本振袖、振袖、中振袖、小振袖)、訪問着の3種類の出現頻度が高い。

ミセスの第一礼装着である留袖類は14年間出現し、婚礼用として着用されている。

ミスの第一礼装着である振袖類は15年間出現しているが、本振袖は'67年を境になくなっている。本振袖は振袖の中でもっとも袖丈が長く、総絵羽模様で刺繍・箔を用いた豪華なものである。黒地は花嫁用、色ものはお色直し、おしゃれ着として用いる格調高いきものであるが、着装場面が少なくまた高価なため略式の中振袖、小振袖に変化してきている。中振袖は本振袖の略式で袖丈95cm前後、総模様ばかりでなく付け下げ模様、肩裾模様などがある。小振袖はさらに袖丈が短く、新しい感覚のきもので結婚式のおよばれにも着ることができる。これらが一般的な総称として今では振袖と呼ばれている。

訪問着は13年間出現頻度が高い。絵羽付けのきもので振袖の豪華さをあらわし、略礼装着としてミセス、ミスをとわず幅広い着装範囲のきものである。

2) 外出着・おしゃれ着

外出着、おしゃれ着としては小紋、紬、お召の出現頻度が高い。特に小紋、紬は19年間連

続して出現頻度が非常に高い。小紋は染めの代表的な外出着であり、古典柄から知的でモダンな柄、また格調高い江戸小紋など応用範囲の広いきものである。お召は織りの代表的な外出着であり9年間出現している。紬は産地の名前をつけたものが多く、洋服感覚で着ることができ独特の民芸調の味を出し、気軽な外出着、おしゃれ着、街着として当初の普段着から変化してきている。

3) 普段着

普段着は紬、緋、ゆかたの出現頻度が高い。

紬は19年間出現頻度が非常に高く、普段着の代表的なきものであった。しかし今ではT.P.Oを考慮し外出着から普段着まで着用できるきものへと変化してきている。

緋は13年間出現している。産地の名前をつけたものが多く、風合いがよく、軽く、また着やすいきものである。

表7 きものの用途別分類

(N)

用途	年代	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	
礼 装 着	礼 装			3	2	5	3	1		1	1		2	2	2	4	5	1	3	3	
	準 礼 装																		1		
	正 装		1																1		
	盛 装		1																		
	喪 服				1	1	1			5			2							1	1
社 交 着	祝 い 着					1	1														
	パーティ 着	5	3	1	1	2		1		1	1	1	2	2	1			1	1		
	晴 れ 着	1	2	2	10	7	4	1	2		1	3	1		1	1	2	1		2	
	およばれ着 よそゆき着		1							1			2								
お しゃ れ 着	外 出 着	5	7	4	4	4	3	2	1			2	1							2	
	お しゃ れ 着	8	9	7	2	7	2	2	2	2	4	2		2	1	1	1	1	5	2	2
	旅 行 着								1												
	街 着	1			2	1		1			1	2									
普 段 着	普 段 着	2	2				3	1	1	1	1		1				1				
	ちよいちよい着				1																
	稽 古 着				1	1															
	家 庭 着				1																
男 物	夏 着 (男)																1				
	夏 衣 (男)																			1	
	し ゃ れ 着						1							1	1						

ゆかたは18年間出現し、普段着の代表的な夏物のひとつとして取り上げられ、家庭でのくつろぎ着として用いられている。

(3) きものの用途

きものの用途には、格付けに準じて礼装着、社交着、おしゃれ着、普段着の用途別に分類することができる。また男物のキーワードにおいては、格付けが不明瞭なため別枠を設けた。

(表7)

1) 礼装着

礼装着は婚礼シーズンにあたる春、秋に集中し出現頻度が高い。さらにわずかではあるが、夏の礼装着を特集で取り上げている。

正装着は、正月、夏のきものとして、また盛装着は秋の訪問着、中振袖を取り上げている。

正装着とは儀礼的な会合に適応した正式な服装という意味から、きもものでは紋付がそれに当たる。また盛装着とは着飾った立派な装いをさし、豪華な訪問着や振袖などがあげられる。

祝い着は秋に出現していることから、七五三のきものであることが伺える。

2) 社交着

社交着の中で、最も出現頻度の高いきものは晴れ着であった。正月用のきものとして特集で取り上げている。晴れ着とは特別な日（正月、その他一般行事など）に改まって着るきものという。最近では正月にきもの姿を目にすることが少なくなったが、'60年代～'70年代前半頃までの出現頻度が高いことから、正月にきものを着用するという風潮がまだ残っていたように思われる。付け下げや無地、小紋など幅広い種類のきものがあげられる。

パーティ着においても、晴れ着ほどではないが出現頻度が高い。季節、年代を問わず年間を通じて出現しているきものである。

3) おしゃれ着

用途別分類において、今回最も出現頻度の高いきものがおしゃれ着であった。また外出着は'60年代～'70年代前半に集中している。

わずかではあるが、街着、旅行着などの出現から、現代よりもきものを自然に、また気軽に着用されていた時代であったと思われる。

4) 普段着

普段着においては、'70年代後半～'80年代にかけてはほとんど出現しないが、'60年代～'70年代前半にかけてわずかに出現している。またちよいちよ衣着や家庭着の出現より、この時代はまだ日常の中にきものが浸透し、普段着よりもさらに生活に密着したきものであると思われる。

5) 男物

男の夏着、男の夏衣からはどのようなきものか不明瞭であるが、趣味のおしゃれ着ではないかと思われる。しゃれ着においては、しゃれたきもの、粋な渋みのあるきもの、という意味から、男物特有の雰囲気表現したきものである。

(4) オケージョン

1) きものと年中行事

最近、季節感の喪失で衣替えという言葉が聞くことが少なくなった。四季の変化に富む日本は自然条件に恵まれている。特にきものは四季に関わる伝統的な年中行事において発展してきたと考えられる。そこで、きもの着装と季節別伝統的な年中行事との関連を調べるために、

表8 きものと年中行事

(N)

四季	年中行事	年代	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82
春	謝 恩 会				1		1	1	1		1	1			1		2	1			
	入 学 ・ 入 園							2	1		2		1	6	2	2	1	2	2	2	2
	卒 業 式													1			1				
	雛 節 句									1											
	十 三 詣 り												4	1			3	2			1
夏	夕 ・ 七 夕		1									1									
	梅 雨 ・ 雨			2								1		1	1	1	1				1
	夏 休 み				1												1				
秋	七 五 三					2	2	1	1	1		1	1	3	3	3	2	2	1	1	
冬	クリスマス		1		1						1	1			1						
	正 月		1	2	2				2	2	1	3		1	1	1	1	2			
	初 春 ・ 他			1			1	1		1		1	2		1	3	3	2	3	3	1
	初 詣									1								1	1		
	成 人 式						1								1	1					1

19年間の目次から年間行事に関するキーワードを表8のように14抽出した。

まず、年中行事のキーワードを季節別にみると、春が5、夏が3、秋が1、冬が5であり、きものと関連する行事は、冬から春にかけて多いことが分かる。きもの着装の「晴の場面」が伝統的にこの季節に集まっているといえる。次に季節別に年中行事を見ていくと、

・春

春の行事の中でのきものは、子供の幼稚園の入園や学校の入学、卒業と関わりが深い。入園・入学は'69年に出現し、以後継続的に25回も登場し、社交着としての関連が非常に高いといえる。それに比べ卒業式にきものが出現したのは'75年と'78年の2回出現したが、内容は女子学生の袴姿ではなく、母親のきものが対象になっている。一方、女子学生を対象にした謝恩会は'66年から19年間で10回も誌面に登場している。卒業式の袴姿よりも早い時期から登場している。

伝統的行事である十三詣りは'74年に出現し、4年毎にテーマとして取り上げられている。

・夏

夏の行事の七夕、梅雨、夏休みの3つのテーマは'64年から'66年にかけて出現しているが、中でも、'73年以降、梅雨が雨コートと関連して継続的に登場している。

・秋

秋は七五三の行事にきもの着装場面が集中している。'67年から継続的に取り上げられ、伝統的な行事に欠かすことのできない子供の祝い着と大人の礼装着である。

・冬

冬の行事では、クリスマスは単発的なテーマとして登場するが、新年に関連する正月、初春、初詣の3つの着装テーマは、毎年いずれかが重点テーマとなり、継続的に取り上げられ、きもの着装場面との関連が最も高いといえる。一方、成人式がはじめて出現するのは'68年から

であるが、7年間登場がなく'76年、'77年、'82年で19年間で4回しかテーマに上がっていない。

年中行事におけるきもの着装場面のテーマ設定は、着装場面が本来曖昧であっても、暗黙

表9 きものとT.P.O.

(N)

用途	T.P.O. \ 年代	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82
礼 装 着	婚礼／披露宴	2	1	2	2			1	2	3	1	1		2		1	4	2	3	1
	結婚式・晴の日																			
社 交 着	招待	9	2	1	1		1	4	2	1		2	1	1			1	1		
	パーティー	1	1	2		1	1	2	2	1	1	1		1	1	1				1
	お茶席	1	1	1			1		1	1				2	1	2	2		1	5
	園遊会															1				
おしゃれ着	避暑地	1	1																	
	旅		1		1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	4	5	4			
	街角／街	1	1		1		2	1	5	3	6	5	4	5	4	4	5	4	3	1
	外出／お出かけ		2	3			2	1				1		1		1			2	1
	買い物				1		1		2	2		1	3	4	4	3	4	4	4	4
	夜／宵	1					3	2						1	3			1	1	
	午後	2							3	5	2	1	1	2		1				1
	クラス会	1							1		1		1							
	食べ歩き									1	4		1	3						
	散策／散歩	1										1	2	2	3	1	3	5	3	4
	劇場／ホール	1		1								1								1
	ホテル	1																		1
	PTA			1																
普 段 着	お稽古					1			1		1	1								
	週末							1			2					1				
	休日										1	1		1						
	下町														1	1		1		
	遊園地															1				
海辺																1				
そ の 他	TPO									1					1					1
	フォーマル									4	1									1

の内にきもの種類や用途に包含されてきたのだと考えられる。

2) きものとT.P.O

きもの着装場面に関する24のキーワード表9を抽出した。着装場面は用途とも関連するので、用途を礼装着、社交着、おしゃれ着、普段着の4つに分類し、用途に合った着装場面にキーワードを分類した。19年間での特徴はおしゃれ着の用途にキーワードが多く集り、着装場面中で出現回数の多いのは、街角／街、買い物／ショッピングなどが上げられる。

・礼装着

婚礼に関するキーワードに集中し、割合継続的に取り上げられ、出現回数も多い。

・社交着

社交着の3大着装場面は招待／お招れ、パーティ、お茶席である。このテーマが毎年重複し

て取り上げられたり、交互に展開されている。園遊会は'78年に1回出現しただけである。

社交着としたのきものを招待／お招れとパーティの場合を比較してみると、前者から後者へ平行しながら次第に移行しているのではないだろうかと考えられる。

お茶席でのきものは3～4年周期で登場し、次第に本格的に取り上げる回数が多くなっている。

・おしゃれ着

'64年におしゃれ着を着る場面が広範囲に広がりを見せているが、翌年の'65年からはきものを着装する場面が旅と外出に関わるテーマに絞られている。'66年は外出に関わるテーマに更に絞られ、'68年には旅以外の着装場面は消えてしまったが、'69年から復活し着装場面は、街／街角、外出、買物から午後／昼下がり、クラス会、食べ歩き、散策／散歩などへと次第に広がりを見せ、'76年をピークにおしゃれ着の着用場面は買物と散策／散歩に絞り込まれていくのである。つまり、おしゃれ着は'69年から約10年間が中心になっていたといえる。

・普段着

普段着の着装場面の設定は'68年にお稽古、'70年に週末／ウィークエンドという言葉が登場し、オイルショックと平行して週休2日制の導入がはじまる'73年頃、着装場面として週末、休日が登場し、普段着の場面は次第に減少し、'80年まで続いた。また、きもの雑誌の誌上にフォーマル、T.P.Oという用語が登場してくるのは'72年である。きもの誌上に新しいヨコ文字の着装概念が登場し、きものが洋服化の影響を受けはじめる時点ではないだろうか。

4. 要約

(1) きもの地

きもの地は染めのきものと織りのきものに二大別された。その他のきもの地としてウール、木綿という素材名が出現した。染めのきものでは小紋、ゆかた、友禅、織りのきものでは紬、緋、お召が高い出現頻度として抽出された。

(2) きもの種類

きもの種類の出現頻度の高いキーワードは紬、訪問着、小紋、振袖、留袖、緋、ゆかた、お召の順になっている。きものにはしきたりや約束ごとがあるが、礼装着から普段着までそれぞれきものにそなわった品格で各自の個性、季節感などT.P.Oにあわせて自由な感覚で着用されるようになってきている。

(3) きもの用途

用途別分類において今回最も出現頻度の高いきものは、おしゃれ着、晴れ着、礼装着、外出着、パーティ着の順であった。中でもおしゃれ着、社交着が高い出現頻度として抽出された。

(4) 年中行事とオケージョン

きものと年中行事の関係は冬から春にかけて多い。冬はクリスマス、正月、初春、成人式、

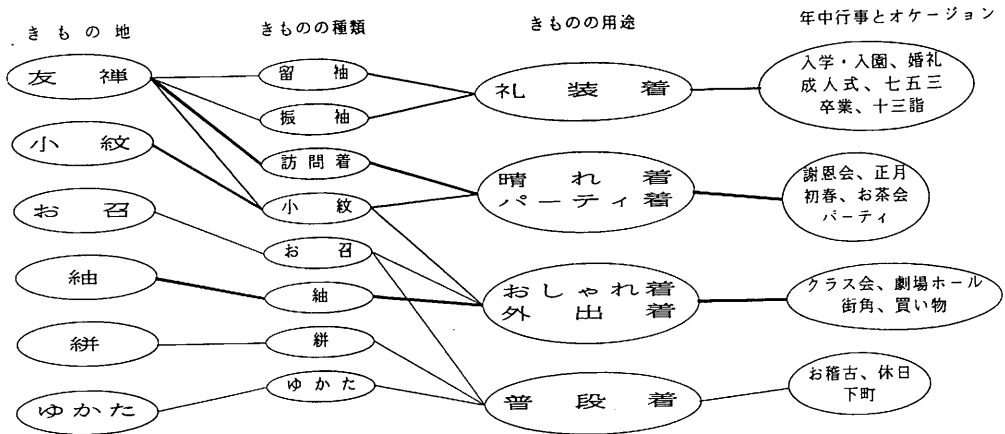


図1 きものに関するキーワードの関連図 ——— 太線は関連性が高い

春は卒業式、謝恩会、入園・入学、十三詣である。秋は七五三に集中する。

着物とT.P.Oの19年間の特徴は旅、外出、街角、散歩／散策、買物などに着用するおしゃれ着の用途にキーワードが多く集り、'69年から'70年代のきもの主流を占めていた。

5.まとめ

(1)～(4)までの分析項目のまとめを総合し、きものに関するキーワードの関連図(図1)を作成した。この結果、19年間の「美しいキモノ」における編集テーマを時系列的に分析することにより、きもの動向を次のように把握することができた。

- ・きもの地においては、友禪、小紋、紬の3つに集約された。
- ・きもの地の種類においては、訪問着、小紋、紬が多く取り上げられている。
- ・きもの用途としてはおしゃれ着、社交着の2つに集約された。
- ・オケージョンにおいては、パーティやお茶会などでの社交着や街角、外出、買い物などのおしゃれ着の2つの用途に集中している。

この19年間のきものは社交着やおしゃれ着に、まだ着場が多かったといえる。

謝辞

今回この研究を進めるにあたり、婦人画報社「美しいキモノ」編集長の岡本光幸氏に資料等のご協力いただきましたことに、深く感謝いたします。

参考文献

- ・美しいキモノ、婦人画報社、(東京)1964春号～1982冬号
- ・日本染織総華 友禪、文化出版局、(東京)1972
- ・日本染織総華 紘、文化出版局、(東京)1973

- ・日本染織総華 小紋、文化出版局、(東京) 1974
- ・最新きもの用語辞典、文化出版局、(東京) 1987
- ・木村孝のきもの・しきたり事典、婦人画報社、(東京) 1988
- ・藤本やす他：被服平面構成、衣生活研究会、(東京) 1991
- ・田中千代：新・田中千代服飾事典、同文書院、(東京) 1991
- ・和裁・初級編、財団法人 日本ファッション教育振興協会和裁専門委員会、(東京) 1995
- ・和裁・中級編、財団法人 日本ファッション教育振興協会和裁専門委員会、(東京) 1995